

	1	2	3	4	5	6	7		
新道	0	0	2	0	0	2	0		
巨仁	2	0	1	0	0	0	0		

	1	2	3	4	5	6	7		
新道	0	0	0	1	1	0	1	1	
半身	1	1	1	0	0	0	0	0	

	1	2	3	4	5	6	7		
新道	0	0	0	4	2	1	0		
早計	5	0	1	0	0	0	0		

	1	2	3	4	5	6	7		
新道	1	0	1	0	0	1	1		
カーブ	0	1	0	2	0	0	0		

	1	2	3	4	5	6	7		
ヤンキ	1	1	0	0	0	0	0		
新道	0	0	2	0	0	1	X		

	1	2	3	4	5	6	7		
新道	1	0	0	0	0	0	2		
全日本	1	0	0	0	0	1	0		

ナイン

定価 八八〇円

第1刷発行 昭和62年6月16日

著者 井上ひさし

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© HISASHI INOUE 1987 Printed in Japan

ISBN4-06-202972-3 (0) 1文21

	1	2	3	4	5	6	7	
	ナ	イ	ン					
	井	上	ひ	さ	し			

	1	2	3	4	5	6	7	

	1	2	3	4	5	6	7	

	1	2	3	4	5	6	7	

	1	2	3	4	5	6	7	

	1	2	3	4	5	6	7	
	講	談	社					

目 次

ナイン

9

太郎と花子

23

新婦側控室

37

隣り同士

51

祭まで

65

女の部屋

79

箱

93

傷

109

記念写真

高見の見物

春休み

新宿まで

会話

会食

足袋

握手

123

135

149

163

177

191

205

219

ナイン

装幀

安野光雅

ナ
イ
ン

文化放送での仕事がいがけず早く終ったので、四ツ谷駅前よなぎの新道にある中村さんの店に寄ってみた。中村さんは畳屋の主人である。店は小さいが裏手に大きな仕事場を持っている。東京で五輪大会が開かれた年の暮から三年間、わたしはその仕事場の二階を借りていた。八畳の台所付き食堂に六畳が二間と四畳半、そのうえ広い風呂場と風通しのいいベランダまであって、家賃は月四万五千円だった。当時の相場の二割方は安かったとおもうが、それはとにかくそれほどの間取りを上に乗せることができるぐらい中村畳店の仕事場は大きいのである。その二階にいまは長男の英夫くん夫婦が住んでいる。

中村さんは王の新政権の発足を報じるスポーツ紙を眺めながら、茶筒に入れた煎餅をかじっていたが、わたしを見ると、

「ここへ来て、おやつをつき合ってやってくださいよ」

と、針だこで鱈子^{たらこ}みたいに膨れあがった指で火鉢の横の畳をかるく打った。スポーツ紙の見出しに誘われて話題は自然に野球のことになったが、そのうちに中村さんは急に膝を進めてきて、

「新道少年野球団は強かったねえ」

ライオンズもジャイアンツも問題じゃないとでもいうような、力の入った口調でいった。

「なにしろ新宿区の少年野球大会で準優勝したぐらいだからなみの強さじゃなかったな。それも決勝戦を延長十二回までたかったうえの準優勝だ。つまり新道少年野球団は優勝したも同じさ。だいたいが優勝チームには投手が三人もいたんだからずるいや。ひきかえ新道には英夫が一人しかいなかった。しかも午前中の準決勝と合せてぶっ続けて十九回も投げ通したんだよ。それも真夏のかんかん照りのもとでの十九回だ。英夫も、新道少年野球団も、ほんとうによくやった」

「憶えていますよ、あのときのことは。こちらの仕事場の二階を借りて二度目の夏のことですから」

「すると、あなたも外濠公園^{そとぼり}野球場へ詰めかけてきなさっていた口か」

「いや、夕方、放送局から戻ってくると、ちょうどバレードにぶつつかつたんです」

上智大学の学生がふえ、近くに大会社のビルがいくつも建ったせいで、道幅四米、長さ百米足らずのこの新道は四谷で一番にぎやかな場所になった。もっとも軒を並べる店は飲み屋に食物屋に喫茶店のどれかに限られてしまい、客を迎えるだけの、厚化粧だが、なんだか素ツ氣のない小路に化けてしまったこともたしかだ。十七、八年前と同じ店構えがなんばっているのは、新道入口のワイシャツ店と、小路の奥のこの畳店ぐらいなものである。当時の新道には生活があった。豆腐屋があり、ガラス店が、お物菜屋が、ビリヤード屋が、そして主人が会社勤めの普通の家があった。四ツ谷駅の方から新道を抜けようとする人は、ゆるやかな勾配の坂を登ることになるが、その坂の真ん中のあたりには歌舞伎役者の大和屋（十世岩井半四郎）の住居すまいもあって、夏の宵などには、白木づくりの玄関の前の、狭いがよく打水した石畳の上で、大和屋が中学生のお嬢さん二人とよく線香花火をしていた。二人のお嬢さんはやがてよく知られた女優になるのだが、ひとことで云えば、そのころの新道は自足していたのである。たいていの日用品は新道のなかにある店屋みせやで充分に間に合っており、それらの店屋はまた新道に住む人たちだけを相手にして、とにかく暮しが立っていた。新道は、ささやかにではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで

小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。いまはたしかに華やかな小路になっているけれど、外からやってくる客の懷中をあてにしないとやってゆけないというところが見えて、なんだか脆い^{もろ}通りになったような気がして仕方がない。

「主将の洗濯屋の正太郎くんが、小さな、準優勝のカップを抱いて大和屋の前を通るところで、わたしはパレードに間に合ったのです。正太郎くんの横には英夫くんがいた。その後で七人が団子みたいにかたまって、くすくすんやっていた。ビリヤード屋のおじさんが監督をしていると聞いていたのに、その姿がなかった。あれ、おかしいなと思った記憶があります」

「ビリヤード屋の大将は決勝戦がはじまるとすぐ暑氣^{あつ}中りを起してひっくり返ってしまったのさ。六十を四つも五つも過ぎていたんだから、これは責められない。それにしても監督なしで、あの九人、よくも十二回までもちこたえたものだ。ほんとうに新道少年野球団は強かった」

「大和屋がお嬢さん二人と出てきて、正太郎くんに御祝儀袋を渡した。その光景も憶えていますよ。大和屋が『よくやったねえ。おつかれさま』とねぎらうと、それまでくすくすんやっていた九人が一斉にわーっと泣き出した」

「よほど口惜しかったのさ」

「あの九人はいまだうしていますか。もちろん英夫くんのこととはよく知っていますが」

「ばらばらになってしまったさ」

中村さんはちよつと目を伏せた。

「一塁をやっていた洋品屋の明彦は大学を出て会社員になった。洋品屋は地所を売って千葉の方へ引っ込んだ。明彦はそこから丸の内の会社に出ているそうだよ。二塁のお惣菜屋の洋一は新宿のホテルでコックをやっている」

中村さんは新道少年野球団のナインのその後の消息によく通じていた。それによると、三塁のガラス店の忠くんはコンピュータ技師、遊撃の文房具店の光二くんは神奈川の中学校教師、左翼の豆腐屋の常雄くんは埼玉で自動車学校を経営しているという。

「この近くにいるのは右翼の魚屋の誠だけかな。誠は文化放送の前で小料理屋をやっている」

「豆腐屋の常雄くんが自動車学校の経営者とは意外でした。あのときはみんな小学校の六年生、つまりいま、やっと三十歳でしょう。その若さで自動車学校を経営するなんて凄じくないですか」

「タクシーの運転手をしているときに、その社長の娘に見染められたらしいね。で、その社長が自動車学校の経営者でもあったわけさ」

「なるほど」

「そういうわけで、みんな新道から出ていってしまったねえ。ここの地価は高い。三、四十坪の狭い土地でも、処分すれば郊外に家を建てたうえ、びっくりするほどのお釣りがかえってくる。だから親たち競争で土地を処分してしまった。お釣りは老後の資金というわけだね。そうそう大和屋も若葉町の方へ引っ越したよ」

中村さんはなぜだか、洗濯屋の正太郎くんのことを抜かしてしまっている。新道少年野球団の四番打者で、捕手で、主将の正太郎のことになぜふれたがらないのか。

「正太郎のことは口にしたくないんだよ」

中村さんはこっちの胸のうちを見抜いたようにいった。

「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる。英夫のやつ、あの正太郎のために畳を八十五万四分も騙し取られてね、そればかりか、おれが警察に届けようとしたら、『それならぼくはこの家を出て行きます』なんて云って脅かすのさ。幼友達をかばうのはいいが、それにも限度ってものがある」